

統括機能から見た文末叙述表現「のダ」・「んダ」の異同

Differences between the Sentence-Final Narrative Expressions *noda* and *nda* Seen from the Perspective of Unifying Functions

宮澤 太聡*

MIYAZAWA Takaaki

Hitherto, it has been said that the difference between the sentence-final expressions *noda* (found in the written language) and *nda* (found in the spoken language) is uniquely a difference of style. However, in this study I have examined the differences between these words from the perspective of unifying functions. Taking four talks from academic lectures and four texts from non-fiction works in a small-paperback format (*shinsho*) as data for my analysis, I have carried out a complete census of sentence-final occurrences of *noda*, and analysed the co-occurrence relation between *noda* and conjunctions. As a result, it has become clear that: (1) in the lecture talks, not only were instances of *nda* found at the end of the topic, but also there was a tendency for this expression to occur at the beginning of topics in several instances, accompanied by the conjunctive expression *de* to express an assumption; (2) in the non-fiction paperbacks, there was a tendency for *noda* to be used accompanied by the conjunctive expression *tsumari* at the end of the topic, to express a paraphrase. The above results may contribute to a reading comprehension whereby function words are used as clues.

キーワード：ノダの統括機能 (Unifying Functions of *noda*)、接続表現 (conjunctive expression)、共起関係 (co-occurrence relation)

1. はじめに

学術的な専門書や講義など、複雑な内容を論理的に伝達することを目的とした文章・談話を速く・正確に理解するには、読みながら、または、聞きながら、その展開的構造を捉えていくことが必須である。

本研究は、言語形態的指標に基づいた「意味のまとまり」を捉える方法を検討し、文章・談話レベルでの理解・表現指導に資することを目的としている。その端緒として、多様に「意味のまとまり」の成立に関わるノダ¹⁾を、同じく言語形態的指標である接続表現との共起関係から分析するものである。

また、これまで違いがないと言われてきた書き言葉的

な「のダ」と話し言葉的な「んダ」²⁾が、それぞれ文章・談話の展開にどのように関わるのかという観点から再検討する。

2. 分析の資料と分析方法

統括機能によるノダの分類は、宮澤 (2011) ですでに示したように、図-1の5類7種となる。それぞれのノダの用法と、ノダと先行文、および、後続文の接続表現との共起関係から、文脈展開の特徴を探る。ノダの分類観点は、基本的に先行研究に従うものであるが、「統括機能」については、新たに「統括力」と「統括の方向」の2種に分類した。以下、分類の観点を確認する。また、接続表現の分類は市川 (1978) に従う。

*大阪観光大学国際交流学部

(1) 分類の観点

- A. 「統括機能」：佐久間（2003：95）は、「複数の文や発話の集合体が大小の話題のまとまりを作り上げる働きにほかならず、話題の相対的なまとまりの度合いを有することを、その本質とするものである。」（下線は筆者が付す）に従う。
- B. 「段」：市川（1978：126）は、文段を「内容上のまとまりとして、相対的に他と区別される部分である。」に従う。佐久間（2003：92-95）は、更に、「文段」と「話段」の総称を「段」とし、段の内容を端的に表した「中心文」を段の成立の必須要件とし、「重層構造」³⁾をなすことを指摘している。
- C. 「ノダの統括機能」：「統括力」と「統括の方向」とを合わせた機能とし、文内部の要素を統括して文を成立させるだけでなく、段、連段を成立させる機能とする。
 - c 1. 「統括力」：ノダが近傍の文を積極的に統括するのか、それとも、他の文に統括されようとするのかといった「統括・被統括の相対的な力関係」（佐久間 2003：95）とする。特に、統括力の弱いノダの機能を「被統括機能」と呼ぶ。
 - c 2. 「統括の方向」⁴⁾：文末表現が、先行する文（群）との間に統括機能を発揮するのか、後続する文（群）との間に統括機能を発揮するのか、または、前方・後方の両方向に統括機能を発揮するのかといった統括の

機能領域を示す。

(2) 本研究の資料

本研究で扱う資料は、新書の文章4編と講義の談話4編である。大学初年次教育を考慮し、新書の文章は、大学教員が専門領域について論じた入門書的なもの、講義の談話4編は、全て人文科学の教養科目の講義を扱う⁵⁾。これらは、複雑な情報を効率よく伝達する「説明」のジャンルに属するという点で共通する。客観性の高い「説明」の中で、ノダがどのように文脈展開に寄与しているのかを考察する。それぞれの資料の総文数とノダの出現数を表-1に示す。

3. 統括機能からみたノダの用法

それぞれのノダの用法がどのようなものか、実際の用例から確認する。

(1) 統括機能を発揮するノダ

1) 前方統括機能を発揮するノダ

1. 「換言」 1.1 「説明」

[1] ユークリッド幾何学の真理について「三角形の内角の和」の例示

281 三角形を書いて分度器をあてて、三つの角の角度を測ってみよう。

表-1 分析資料の総文数の内訳⁶⁾

A. 新書の文章	①「分かち合い」の経済学	②西洋哲学史近代から現代へ	③「わかる」とは何か	④「できる人」はどこがちがうのか	合計	ノダ
	2,013 文	3,639 文	1,593 文	2,719 文	9,964 文	457 文 (4.6%)
B 講義の談話	⑤講義 A	⑥講義 B	⑦講義 C 1	⑧講義 E 1	合計	ノダ
	418 文	473 文	616 文	585 文	2,092 文	385 文 (18.4%)

I. 統括力 II. 方向 III. ノダの用法

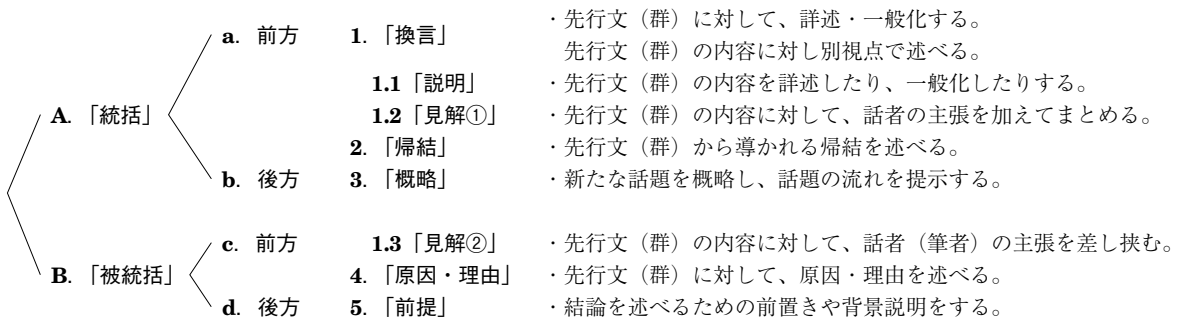


図-1 統括機能によるノダの分類

- 282 それぞれの角度を厳密に測って合計して、ちょうど一八〇度になるだろうか。
- 283 厳密に測れば測るほど一八〇度からわずかにずれた値となるにちがいない。
- 284 さまざまの異なった形の三角形を書いて測ってみても同じである。
- 285 このようにに実際の三角形を調べてみると、内角の和はつねにほんとうに一八〇度になっているわけではない。
- 286 したがって、実験から「三角形の内角の和は二直角である」という結論はほとんど出すことができない。
- 287 つまり、これは実証的に証明することができないことなのである。〔説明〕 ③

文 285 の接続表現「このように」で、事実をまとめ、文 286 の接続表現「したがって」で、結論を述べる。文 287 は、ノダが「つまり」をとまなうことで、先行文 286 の内容を言い換えることで説明している⁷⁾。このノダは前方統括機能を発揮し、文 281～287 を統括し、「文段」を成立させる⁸⁾。

1.2 「見解①」

[2] 村上春樹『納屋を焼く』の解説

- 474 で、その彼氏はですね、納屋を焼くのが趣味だというんですね。〔帰結〕〔前提〕
- 475 納屋を焼くのが趣味だ。
- 476 そのへんからやっぱり、これは何かあるなと思うんですね、やっぱり。〔見解①〕 ⑦

文 474～475 の内容に対して、文 476 は、ノダをとまなない、筆者の見解を込めて、換言している⁹⁾。文 476 は、文 474～475 だけでなく、後述する先行文 471～475 までの前提を、見解を述べることで統括し、「話段」を成立させる。

2. 「帰結」

[3] 文章のあいまいさと科学的論文の関係についての解説

- 965 自然科学の世界では、外界対象、その対象間に存在する各種の関係などについて専門家の人々が共有できる概念が形成され、それに名称が与えられているので、その名称の定義内容・意味はかなり明確であるし、科学技術論文の場合は、たとえ文章そのものにあいまいさが含まれていても、それが述べている事実関係が物理法則から見てあいまいさのないもので、これが論文を読む研究者に直観的に理解できるものである場合には、読者はと

うぜん唯一の解釈しか読みとらない。

- 966 このように、文章が記述している対象が外界世界のものであり、多くの人に共有されうる客観的事実である場合には、文章上の不明確さはそれほど深刻な問題ではないといえる。

- 967 したがって、そのような知識をあらかじめもっていない人の場合が問題となるのである。〔帰結〕③

文 965 を文 966 が「このように」をとまなうことで統括し、文 967 のノダが、順接の接続表現「したがって」と共起することで、結論を表している。文 967 のノダは順接の接続表現「したがって」と共起し、文 965～967 を統括し、「文段」を成立させる。

以上「1. 換言」「2. 帰結」は、ノダが前方統括機能を発揮し、先行文(群)を統括することで、「段」を成立させるという文脈展開となっている。

2) 後方統括機能を発揮するノダ

3. 概略

[4] 「話し言葉の言い換え」の話題の開始

- 201 (8) で、話し言葉における言い換えというのは、基本的に、言い換えというよりも、「言い直し」、と思われることのほうが多いんですね↑。〔概略〕
- 202 で、あの一、言い換えにも二通りあると思うんですね↑。〔概略〕
- 203 一つは、二通りの表現を、もうすでに準備していて、一つの事柄に対する二通りの表現がすでに、頭の中に存在していて、それを並べる。
- 204 つまり、準備された言い換えと、それから、もう一つは、一つの言葉を口に出してみても、口に出すと、相手の反応も見えますし、また、自分の耳でも聞きますよね↑。
- 205 で、耳による印象っていうのもありますよね↑。
- 206 「あっ、それで、あっ、この言葉、相手の表情が曇ったから、まずい、言い換えよう。」とか、「ちょっと今の言葉、心なかったから、言い換えなきゃいけないな。」とか一、まあ、それとか、「今の表現も一、まあ悪くはないけれども、もっといい表現を、今、思いついたんだ。」とか、ありますよね↑。
- 207 その時に、まあ、上書きというか、上に重ねるようにして、言い換える、というのが、話し言葉の言い換えの特徴。
- 208 つまり、まあ、話し言葉における言い換えというのは、言い直しである。
- 209 即興的な言い換えである、というふうに言えま

す。 ⑤

文 201 は、「話し言葉の言い換え」について、転換の接続表現「で」をとめない、やや、唐突に概略的なまとめを述べている。そのため、文 204「それから」以降～207 で、文 201 の理解に必要な情報を補足している。文 201 は、後続する補足内容を後方統括し、また、文 208～209 が、「つまり」をとめない、文 201 と同様の内容をさらに詳しく反復することで、「話段」が成立している¹⁰⁾。文 202 も、同様に、ノダが転換の接続表現「で」をとめない新たな話題を開始している。しかし、後続文 203、204、207 がなければ、「二通り」の内実がまったくわからない。同じ〔概略〕ではあるが、後続文の情報が必須である点が文 201 とは異なる。

以上、「1. 換言」「2. 帰結」「3. 概略」は、いずれも、統括機能を発揮することで、段を成立させる機能があると考えられる。

(2) 被統括機能を発揮するノダ

1) 前方被統括機能を発揮するノダ

1.3 「見解②」

[5] 前期の授業の振り返り

15 それから、あの、テストの結果をすごく気に入っている人が結構いました。

16 で、平均点はどれぐらいとか、何か受験時代を思い出してるんでしょうかね。〔見解②〕

17 えーと、ちゃんと出してません。 ⑧

文 16「何か～」以降は、先行文 15～16「～とか、」に対して、ノダによって、話者の見解を差し挟んでいる。文 16「何か～」以降は、先行文 15～16「～とか、」に統括される前方被統括機能を発揮している点で、1.2「見解①」とは異なる¹¹⁾。

4. 「原因・理由」

[6] 純粋科学や地震・環境問題などの研究内容が複雑でむずかしいことの解説

99 科学技術者は、こういう問題について研究をし、専門分野の学術雑誌に研究結果を報告する。

100 これが彼らの仕事である。

101 研究すべき課題は山積しているので、学術論文を書けば、すぐつぎの研究にとりかかり、学術論文の内容をやさしく誰にでもわかるように解説するようなことはほとんどしない。

102 そのような時間はないし、またやさしく書くということは、科学技術者にとってじつはひじょうにむずかしい仕事なのである。〔原因・理由〕

103 そこで、科学技術の内容を一般の人たちにわかるように解説することを専門とする科学技術ジャーナリストが登場することになる。③

文 102 は、ノダによって、文 101 の事実に対して、理由を補足している。文 102 は、前方被統括機能を発揮し、文 101 に統括される関係となっている。文 103 から、新たな話題「科学技術ジャーナリスト」が開始されるが、文 102 を省略したとしても、文脈が損なわれないことから相対的に重要度の低い情報であると考えられる。

以上の「1.3 見解②」「4. 原因・理由」は、前方被統括機能を発揮することで、先行文にまとめられるという文脈展開となっている。

2) 後方被統括機能を発揮するノダ

5. 「前提」

[7] 村上春樹の短編小説についての解説

469 で、まー、それはちょっと長編で、なかなか手がつけれないので、えっと、「納屋を焼く」をちょっと見てみたいと思います。

470 7 のところの引用を見ていただきたいんですが。〔前提〕

471 で、「納屋を焼く」という短編はですね、あの、やはり「ぼく」という語り手兼主人公が出てくるんですが、「ぼく」が、まー、あの、ある、何ですか、カップルと知り合いになってるんですね。〔前提〕

472 男性と女性なわけです。

473 で、その女の子のほうが、まー、先に「ぼく」の友達だったんだけど、彼氏ができたっていうんで、紹介されるわけなんですね。〔前提〕 ⑦

文 470 のノダは、新たな話題の開始を予告するという点で「前提」として後方被統括機能を発揮している。続く文 471、473 のノダは、追加の接続表現「で」をとめない、「前提（背景説明）」を重ね、後方被統括機能により、後続文への文脈の展開を促す。

以上、「1.2 見解②」「4. 原因・理由」「5. 前提」は、被統括機能を発揮することで、より統括力のある文にまとめられようと考えられる。

また、ノダが前方へも後方へも統括機能を発揮している例も見られる。

[8] 新自由主義が「分かち合い」の経済学を否定する根拠の解説

1312 「小さな政府」で経済成長が実現できるのか

1313 「分かち合い」は経済成長を抑制し、財政収支と対立すると新自由主義は説教する。

1314 しかし、それは現実にはありえない絵空事なのである。〔帰結〕〔概略〕

1315 表 5-1 には新自由主義を布教するアメリカをアングロ・サクソン・モデルの代表国として取り上げ、新自由主義のインパクトを受けながらも、アメリカン・モデルを拒否し、ヨーロッパ社会経済モデルを新しい状況に適応させようとしている二つのモデルの代表国を掲げている。①

文 1314 のノダは、接続表現「しかし」をともない、先行文 1313 に対して、逆接的な展開で「帰結」を述べる。この帰結は、それ自体では、情報が十分ではないので、ノダによって後方統括機能を発揮し、後続文 1315 以降に補足情報を求める「概略」となる。前方にも後方にも統括機能を発揮するノダの存在は、ノダを P と Q との単一的な関係を示すものとして扱ってきた従来の研究¹²⁾の問題点を浮き彫りにするものである。この問題は、上に示したように、ノダによる統括の多重性の観点を導入することで解決できる。

以上、5 類 7 種のノダの用法を概観したが、表-2 に資料別のノダの用法の内訳を示す。

(i) 新書の文章は、統括機能を発揮するノダが比較的多く(新書 292 例 63.9%、講義 174 例 45.2%)、講義の談話は、被統括機能を発揮するノダが多い(新書 165 例 36.1%、講義 152 例 54.8%)。

(ii) 新書の文章は、前方統括機能の「1.1 説明」「2 帰結」が講義の談話の 2 倍強で、逆に、講義の談話は、後方被統括機能の「5 前提」が新書の文章の 3 倍である。

以上の 2 点から、新書の文章は、前方統括機能のノダが基調となっており、講義の談話は、後方被統括機能のノダが基調となっていることがわかる。

次に、ノダと接続表現の共起関係から、新書の文章と

講義の談話の文脈展開方法を分析する。

4. ノダと共起する接続表現¹³⁾

ノダが付される文と先行文との接続関係を表す接続表現と、ノダが付される文と後続文との接続関係を表す接続表現を分析する。結果は表-3~表-6 に記す。

今回は、特に用例数が多く、共起関係が顕著なものとして、新書の文章の接続表現「つまり」、講義の談話の接続表現「で」を取り上げ、ノダとの共起関係がどのように「意味のまとまり」に関与しているのかを分析する。

(1) 新書の文章におけるノダの文脈展開の特徴

新書の文章のノダは、「つまり」をともない、直前の先行文群だけでなく、さらに広範囲の前方統括機能を発揮する。(60 例 13.13%)

[9] 新自由主義が「分かち合い」の経済学を否定する根拠の解説

1312 「小さな政府」で経済成長が実現できるのか

1313 「分かち合い」は経済成長を抑制し、財政収支と対立すると新自由主義は説教する。

1314 しかし、それは現実にはありえない絵空事なのである。〔帰結〕〔概略〕

1315 表 5-1 には新自由主義を布教するアメリカをアングロ・サクソン・モデルの代表国として取り上げ、新自由主義のインパクトを受けながらも、アメリカン・モデルを拒否し、ヨーロッパ社会経済モデルを新しい状況に適応させようとしている二つのモデルの代表国を掲げている。

1316 つまり、ドイツやフランスなどのヨーロッパ大陸モデルの代表国としてドイツを、スカンジナビア・モデルの代表国としてスウェーデンを取り上げている。

1317 それに日本を加えてある。

(18 文省略 ドイツ、スウェーデン、アメリカ、日本の社会経済の説明 この間にノダ無)

1334 確かに、アメリカをみれば、二〇〇年から二〇〇

表-2 資料別ノダの用法の内訳

ノダの用法 資料	1.1 説明	1.2 見解①	2 帰結	3 概略	1.3 見解②	4 原因・理由	5 前提	6 複合	合計
新書の文章	143[31.3]	51[11.2]	97[21.2]	1[0.2]	0[0.0]	46[10.1]	42[9.2]	77[16.8]	457[100.0]
講義の談話	54[14.0]	51[13.2]	40[10.4]	29[7.5]	43[11.2]	2[0.5]	107[27.8]	59[15.3]	385[100.0]

表-3 新書の文章におけるノダと共起する接続表現

接続表現 ノダの有無	1. 順接										2. 逆接					3. 添加					4. 対比					5. 転換					6. 同列					7. 補足			総文数
	1 よだから	2 そのため	3 したがって	4 *このように	5 こうして	6 かくて	7 その結果	8 その他	9 しかし	10 が	11 だが	12 けれども	13 とはいえ	14 にもかかわらず	15 ところが	16 そして	17 さらに	18 しかも	19 また	20 *これに対して	21 *逆に	22 むしろ	23 あるいは	24 その他	25 では	26 それでは	27 すなわち	28 つまり	29 いわば	30 たとえば	31 その他	32 なぜなら	33 もともと						
ノダあり	2[1] (0.44)	4[1] (0.88)	5[0] (1.09)	3[1] (0.66)	4[1] (0.88)	1[0] (0.22)	6[2] (1.31)	9[1] (1.97)	15[0] (3.29)	2[0] (0.44)	2[0] (0.44)	2[1] (0.44)	1[0] (0.22)	6[1] (1.31)	6[1] (1.31)	6[1] (1.31)	6[4] (1.31)	11[0] (2.41)	10[8] (2.19)	2[0] (0.44)	2[1] (0.44)	3[2] (0.66)	4[2] (0.88)	2[0] (0.44)	4[2] (0.88)	10[0] (2.19)	60[3] (1.53)	7[5] (1.75)	8[2] (1.75)	3[0] (0.66)	1[0] (0.22)	1[0] (0.22)	2[0] (0.44)	457 (100)					
ノダなし	41[7] (0.43)	51[13] (0.54)	92[18] (0.97)	45[4] (0.47)	19[4] (0.2)	29[20] (0.31)	16[8] (0.17)	22[4] (0.23)	286[11] (3.01)	37[4] (0.39)	49[20] (0.52)	35[13] (0.37)	5[2] (0.05)	59[0] (0.62)	69[17] (0.73)	51[29] (0.54)	105[27] (1.1)	135[83] (1.42)	39[5] (0.41)	14[1] (0.15)	39[28] (0.41)	25[102] (0.41)	3[0] (0.03)	13[2] (0.14)	16[6] (0.17)	203[71] (2.14)	29[23] (0.31)	156[37] (1.64)	6[1] (0.06)	2[0] (0.02)	36[10] (0.38)	9507 (100)							
合計	43[8] (0.43)	55[14] (0.55)	97[18] (0.97)	48[5] (0.48)	23[5] (0.23)	30[20] (0.3)	22[10] (0.22)	24[4] (0.24)	301[11] (3.02)	39[4] (0.39)	50[20] (0.5)	37[14] (0.37)	6[2] (0.06)	65[0] (0.65)	75[18] (0.75)	57[33] (0.57)	116[27] (1.16)	145[91] (1.46)	41[5] (0.41)	16[2] (0.16)	42[30] (0.42)	29[104] (1.29)	3[0] (0.03)	15[3] (0.15)	20[8] (0.2)	96[40] (2.64)	36[28] (0.36)	164[39] (1.65)	6[1] (0.06)	3[0] (0.03)	37[10] (0.37)	9964 (100)							

表-4 新書の文章におけるノダの後続文に現れる接続表現

接続表現 ノダの有無	1. 順接										2. 逆接					3. 添加					4. 対比					5. 転換					6. 同列					7. 補足					総文数
	1 そこで	2 そのため	3 それゆえ	4 したがって	5 *このように	6 こうして	7 かくて	8 そのうえで	9 しかし	10 とはいえ	11 けれども	12 ところが	13 その他	14 にもかかわらず	15 しかも	16 また	17 そして	18 *これに対して	19 *逆に	20 *これに対して	21 あるいは	22 では	23 それでは	24 すなわち	25 つまり	26 それでは	27 すなわち	28 たとえば	29 ただ	30 もともと	31 もともと	32 確かに	33 たとえ								
ノダあり	3[0] (0.66)	3[1] (0.66)	1[0] (0.22)	9[0] (1.97)	12[1] (2.63)	2[1] (0.44)	1[0] (0.22)	1[0] (0.22)	18[1] (3.94)	1[0] (0.22)	7[0] (1.58)	2[0] (0.44)	9[2] (1.97)	4[3] (0.88)	2[0] (0.44)	2[0] (0.44)	3[0] (0.66)	1[0] (0.22)	1[0] (0.22)	6[5] (1.31)	2[0] (0.44)	2[1] (0.44)	6[4] (1.31)	8[4] (1.75)	2[0] (0.44)	2[0] (0.44)	3[1] (0.66)	12[1] (2.63)	7[1] (1.58)	1[0] (0.22)	7[6] (1.58)	457 (100)									
ノダなし	64[11] (0.67)	56[14] (0.59)	9[5] (0.09)	88[18] (0.93)	44[5] (0.46)	21[4] (0.22)	29[20] (0.31)	4[1] (0.04)	283[10] (2.98)	36[14] (0.38)	58[0] (0.61)	9[2] (0.09)	107[25] (1.13)	141[88] (1.48)	7[2] (0.07)	38[5] (0.4)	15[2] (0.16)	0[0]	123[99] (1.29)	13[3] (0.14)	18[7] (0.19)	18[7] (0.84)	80[36] (0.84)	255[70] (2.68)	160[37] (1.68)	4[2] (0.04)	69[37] (0.73)	63[6] (0.66)	30[9] (0.32)	10[3] (0.11)	13[5] (0.14)	9507 (100)									
合計	67[11] (0.67)	59[15] (0.59)	10[5] (0.1)	97[18] (0.97)	56[6] (0.56)	23[5] (0.23)	30[20] (0.3)	5[1] (0.05)	301[11] (3.02)	37[14] (0.37)	65[0] (0.65)	11[2] (0.11)	116[27] (1.16)	146[91] (1.46)	9[2] (0.09)	41[5] (0.41)	16[2] (0.16)	1[0] (0.01)	129[104] (1.29)	15[3] (0.15)	20[8] (0.2)	18[7] (0.86)	86[40] (0.86)	263[74] (2.64)	164[39] (1.65)	6[2] (0.06)	72[38] (0.72)	75[7] (0.75)	11[3] (0.11)	20[11] (0.2)	9964 (100)										

用例が5例に満たない接続表現は、それぞれの分類の「その他」にまとめて集計した。[]は、文中の使用数を示す。()は、総文数に対する割合を示す。なお、一文中に複数の接続表現が使用された場合、重複して数えるため、接続表現の合計数と接続表現が使用される総文数とは一致しない。

表-5 講義の談話におけるノダと共起する接続表現

接続表現 ノダの有無	1. 順接					2. 逆接		3. 添加					4. 対比		5. 転換			6. 同列			7. 補足			総文数 (100)
	1 それで	2 で	3 だから	4 ですから	5 その他	6 でも	7 しかし	8 その他	9 そして	10 で	11 それから	12 まず	13 あと	14 また	15 その他	16 それに対して	17 じゃあ	18 で	19 つまり	20 たとえば	21 その他	22 ただ	23 実は	
ノダあり	3[3] (0.78)	18[1] (4.68)	4[4] (1.04)	2[1] (0.52)	5[4] (1.3)	7[3] (1.82)	2[2] (0.52)	5[1] (1.3)	3[2] (0.78)	40[5] (10.39)	4[2] (1.04)	4[3] (1.04)	1[1] (0.26)	2[2] (0.52)	2[2] (0.52)	2[1] (0.52)	71[5] (18.44)	7[8] (1.82)	12[1] (3.12)	7[5] (1.82)	11[3] (2.86)	9[5] (2.34)	2[1] (0.52)	385 (100)
	32[13] (8.31)					14[6] (3.64)		54[15] (14.03)					26[14] (6.75)		73[7] (18.96)			84[41] (4.92)			22[9] (5.71)			
ノダなし	13[8] (0.76)	41[2] (2.4)	15[15] (0.88)	14[3] (0.82)	8[1] (0.47)	36[14] (2.11)	14[9] (0.82)	7[1] (0.41)	26[12] (1.52)	118[9] (6.91)	74[24] (4.34)	7[6] (0.41)	16[11] (0.94)	14[11] (0.82)	7[6] (0.41)	9[3] (0.53)	10[6] (0.59)	207[29] (12.13)	21[13] (2.99)	12[12] (0.7)	11[5] (0.64)	7[6] (0.41)	1[0] (0.06)	1707 (100)
	91[29] (5.33)					57[24] (3.34)		255[73] (14.94)					84[41] (4.92)		217[182] (12.71)			84[41] (4.92)			19[11] (1.11)			
合計	16[11] (0.76)	59[3] (2.82)	19[19] (0.91)	16[4] (0.76)	13[5] (0.62)	43[17] (2.06)	16[11] (0.76)	12[2] (0.57)	29[14] (1.39)	158[14] (7.55)	78[26] (3.73)	11[9] (0.53)	17[12] (0.81)	16[13] (0.76)	9[8] (0.43)	11[4] (0.53)	12[8] (0.57)	278[34] (13.29)	63[17] (3.01)	28[21] (1.34)	19[17] (0.91)	16[11] (0.76)	3[1] (0.14)	2092 (100)
	123[42] (5.88)					71[30] (3.39)		309[88] (14.77)					110[55] (5.26)		290[249] (13.86)			41[20] (1.96)			41[20] (1.96)			

表-6 講義の談話におけるノダの後続文に現れる接続表現

接続表現 ノダの有無	1. 順接					2. 逆接		3. 添加					4. 対比		5. 転換			6. 同列			7. 補足			総文数 (100)	
	1 それで	2 で	3 だから	4 ですから	5 その他	6 でも	7 しかし	8 その他	9 そして	10 で	11 それから	12 まず	13 あと	14 また	15 その他	16 それに対して	17 じゃあ	18 で	19 つまり	20 たとえば	21 その他	22 ただ	23 実は		24 その他
ノダあり	2[2] (0.52)	12[0] (3.12)	6[6] (1.56)	6[1] (1.56)	3[1] (0.78)	4[1] (1.04)	4[3] (1.04)	4[1] (1.04)	3[2] (0.78)	41[3] (10.65)	10[4] (2.6)	5[4] (1.3)	2[2] (0.52)	3[3] (0.78)	0[0] (0)	2[1] (0.52)	3[3] (0.78)	69[4] (17.92)	11[5] (2.86)	5[3] (1.3)	5[5] (1.3)	3[2] (0.78)	3[1] (0.78)	2[1] (0.52)	385 (100)
	29[10] (7.53)					12[5] (3.12)		64[18] (16.62)					21[39] (5.45)		72[7] (18.7)			84[4] (2.08)			84[4] (2.08)				
ノダなし	13[7] (0.76)	47[3] (2.75)	13[13] (0.76)	10[3] (0.59)	7[2] (0.41)	31[12] (1.82)	12[8] (0.7)	8[1] (0.47)	26[12] (1.52)	117[11] (6.55)	68[22] (3.98)	6[5] (0.35)	15[10] (0.88)	13[10] (0.76)	9[8] (0.53)	9[3] (0.53)	8[3] (0.47)	209[30] (12.24)	52[12] (3.06)	21[15] (1.23)	14[12] (0.82)	19[6] (1.11)	11[10] (0.64)	1[0] (0.06)	1707 (100)
	90[28] (5.27)					51[21] (2.99)		258[82] (15.11)					87[52] (5.1)		217[38] (12.71)			87[52] (5.1)			31[16] (1.82)				
合計	15[9] (0.72)	59[3] (2.82)	19[19] (0.91)	16[4] (0.76)	10[3] (0.48)	35[13] (1.67)	16[11] (0.76)	12[2] (0.57)	29[14] (1.39)	158[14] (7.55)	78[26] (3.73)	11[9] (0.53)	17[12] (0.81)	16[13] (0.76)	9[8] (0.43)	11[4] (0.53)	11[6] (0.53)	278[34] (13.29)	63[17] (3.01)	26[18] (1.24)	19[17] (0.91)	22[8] (1.05)	14[11] (0.67)	3[1] (0.14)	2092 (100)
	119[38] (5.69)					63[26] (3.01)		322[100] (15.39)					108[91] (5.16)		289[40] (13.81)			39[20] (1.86)			39[20] (1.86)				

六年にかけて、三・〇%という高い経済成長を実現している。

1335 逆に社会的支出の大きなドイツの経済成長率は低くなってしまっている。

1336 ところが、社会的支出の「大きな政府」であるスウェーデンでは、アメリカと肩を並べるように高い経済成長を誇っている。

1337 それとは対照的に、アメリカの強要する新自由主義を従順に崇めている日本は、ドイツと同様に低い経済成長率に喘いでいる。

1338 つまり、社会的支出が大きいか小さいかは、経済成長率とは無関係なのである。〔説明〕

1339 「小さな政府」にすれば、経済成長が実現するという「小さな政府」のドグマは、迷信にすぎないのである。〔帰結〕

1340 「小さな政府」でも財政支出は抑制できない①

文 1314 は、ノダによって、後続文群の概略を述べている。文 1338 のノダは、第一義的には、文 1334～1337 を「換言」することで、前方統括機能を発揮するが、この「社会的支出が大きいか小さいかは、経済成長率とは無関係だ」が、文 1314 がなぜかを問う「課題」であるとするれば、その「解答」となっている。そのため、文 1338 は、さらに、文 1315～1337 という高次元の文段を統括するノダでもある。文 1339 のノダは、文 1315～1338 の根拠に対する「帰結」として全体を統括しており、文 1314 とともに、統括機能を発揮し、文段を成立させている。

(2) 講義の談話におけるノダの文脈展開の特徴

講義の談話において、接続表現「で」を伴うノダが多く、後続文においても、「で」を伴うことが多い。例 [10] は、話段の開始に接続表現「で」と後方被統括機能を発揮するノダが共起することで、話題の前提を述べるという展開となっている。

[10] 村上春樹の短編小説についての解説

469 で、まー、それはちょっと長編で、なかなか手がつけれないので、えっと、「納屋を焼く」をちょっと見てみたいと思います。

470 7 のところの引用を見ていただきたいんですが。〔前提〕

471 で、「納屋を焼く」という短編はですね、あの、やはり「ぼく」という語り手兼主人公が出てくるんですが、「ぼく」が、まー、あの、ある、何ですか、カップルと知り合いになってるんですね。

〔前提〕

472 男性と女性なわけです。

473 で、その女の子のほうが、まー、先に「ぼく」の友達だったんだけど、彼氏ができたっていうんで、紹介されるわけなんですね。〔前提〕

474 で、その彼氏はですね、納屋を焼くのが趣味だっていうんですね。〔帰結〕〔前提〕

475 納屋を焼くのが趣味だ。

476 そのへんからやっぱり、これは何かあると思うんですね、やっぱり。〔見解①〕

477 えー、出来事の核なんです。〔説明〕

478 ところが、納屋を焼いたかどうか、どこの納屋を焼いたかってのは、よくわからないまま終わってしまいます。

479 つまり、出来事の核は隠ぺいされているんですね。〔説明〕 ⑦

文 469 は、転換の接続表現「で」と、「[「納屋を焼く」をちょっと見てみたいと思います。]、文 470 「7 のところの引用を見ていただきたいんですが。」によって、新たな話題「納屋を焼く」への展開が示される。文 471 で、転換の接続助詞「で」と、「[「納屋を焼く」という短編はですね」と話題が取り上げられ、ノダを伴って、前提（背景説明）が述べられる。文 473 も、追加の接続表現「で」+「んですね」によって、前提が述べられる。文 474 のノダは、順接の接続表現「で」によって、背景説明から話題の提示へと文脈が展開する。そのため、前方統括機能とともに、後方被統括機能を発揮していると考えられる。これらは、文 477 の「出来事の核だ」を導き出すために機能していると考えられる。

このような接続表現「で」+「ノダ」は、話段の開始部の前提としてのみ現れるわけではない。次の例 [11] は、前方統括機能を発揮するノダが接続表現「で」とともに複数添加される例である。

[11] 坊っちゃんの異なった読み方の解説

286 でー、今の見てもらってもわかるように、「俳句（を）やりますかと来たから、こいつは大変だと思って、やりません、左様ならと帰って来た。」

287 発言したのはここだけですよ。

288 かぎ括弧で括って出せるの、ここだけでしょ↑。

289 で、後ろの部分ね、内心で言 [ゆ] ってるだけなんですよ。〔前提〕

290 出してないの、口に。〔説明〕

291 これを出してたら、それは、ポンポン言いたいこと言ってね、小気味よくなって、内に溜めるものな

くて、いいよね、って感じなんですけど。〔見解②〕

292 実はね、大半が口から出てないんですよ。〔説明〕

293 全部、文章に入ってるだけで、発言になってないの。〔説明〕

294 で、そうするとね、実は 笑い 口べたで、内向的な 笑い キャラなんじゃないかと。〔帰結〕

295 で、これが出せたなら、むしろ物事は進展するし、別の展開があるのに、坊っちゃんは、それを発言できない、表現できない、口べたなキャラで、爽快感などないって指摘があるんですよ。〔帰結〕

296 で、新しい『坊っちゃん』の読み方みたいな、一つの見方で面白いなと思ったんですけど。〔見解①〕

⑥

文294から、順接の接続表現「で」「そうするとね」を伴って、文289～293から導き出される帰結を述べている。文295～296で、前方統括機能を発揮するノダが追加の接続表現「で」を伴って追加されることで、統括の多重構造をなし、より複雑な文脈展開となっている。

5. 結論

新書の文章では、前方統括機能のノダの割合が高く(291例63.7%)、講義の談話では、後方被統括機能のノダの割合が高いことがわかった(講義の談話107例27.8%、新書の文章42例9.2%)。これらの傾向から、新書の文章のノダと講義の談話のノダとの文脈展開の異同の特徴を挙げる。

新書の文章のノダ：同列の接続表現「つまり」との共起(60例13.13%)

a. 文段の終わりに現れ、接続表現「つまり」をとともない、前方統括機能を発揮し、広範囲の文段を多重に統括する。

講義の談話のノダ：追加の接続表現「で」との共起(ノダ40例10.39%、後続文41例10.15%)

b. 添加型の接続表現「で」をとともない、後方被統括機能を発揮し、話題の前提を追加していく。

c. 添加型の接続表現「で」をとともない、前方統括機能を発揮し、帰結や見解を追加し、多重に統括していく。

このように、ノダは、接続表現との共起関係を分析することで、その統括機能を絞り込むことができる。そうすることで、ノダを手がかりとした「意味のまとまり」

の多重性を捉えた読解につなげられるだろう。

今回は、ノダについては、「のダ」と「んダ」との異同を扱ったが、ノダがどのような表記形で現れるのかを詳しく分析することはできなかった。特に、「よ」「ね」等の終助詞との共起も、講義の談話においては非常に多く見られたことから、今後は、ノダがどのような表記形で現れるのかという観点を加えて分析していきたい。

【補注】

- 1) 霜崎(1981)永野(1986)奥田(1990)等。
- 2) 野田(1997: 27)は、「話しことばと書きことばの差」として、「んです」と「のです」とを区別しているが、「基本的には同じ機能をもって」いるとし、その異同を特に論じることはない。(角田(2004: 70-71)にも、同様の記述がある。)
- 3) 佐久間編著(2010: 47)では、「多重性」という用語が使用されている。
- 4) 佐久間(2003)では、「前方・後方」に加え、「内的・外的」という観点を導入して分析している。
- 5) 筆者が所属する早稲田大学文章・談話研究会の共同研究成果をお借りした。
- 6) ⑤講義Aと⑥講義Bは、60分の講義時間のため、文数が少なくなっている。
- 7) 山口(1975)が指摘する「～ということは、～ということだ」という「換言」と重なる。
- 8) 霜崎(1981)や永野(1986)が、「段落」の終わりに「ノダ」が多く現れることを指摘している。
- 9) 厳密には、「換言」と言い難いところもあるが、「～ということは、～ということだ」という構文が成り立っているという点で、ここでは「換言」の一種として扱う。
- 10) 「～というふうに言えます」は、ノダのように統括力の強い表現であると考えられるが、本発表の論旨とは異なるため、ここではこれ以上扱わない。
- 11) 文15～17が、事実を述べる話段であることも関係していると考えられる。事実を述べることを基調とする話段のため、見解が挿入的になると考えられる。
- 12) 石黒(2003)には、このような機能は稀であるとしているが、実際の用例を見ると、必ずしも稀だとはいえないことがわかる。
- 13) 本稿は、ノダと共起した接続表現については、全数調査を行ったが、ノダとまったく共起していない接続表現は、扱わなかった。ノダと共起しない接続表現の分析も含め、今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

- 石黒圭(2003)『『のだ』の中核的機能と派生的機能』『一橋大学留学生センター紀要6』
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 国広哲弥(1984)『『のだ』の意義素覚え書』『東京大学言語

学論集 84]

- (1992) 「『のだ』から『のに』・『ので』へ」- 『の』の共通性」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版
- 佐久間まゆみ (2003) 「第5章 文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座』7 北原保雄監修 朝倉書店
- 編著 (2010) 『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 霜崎實 (1981) 「ノダル考-テキストにおける結束性の考察-」『Sophia linguistica』7 上智大学
- 角田 三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 山口佳也 (1975) 「『のだ』の文について」『国語学研究』56 早稲田大学国文学会
- 名島義直 (2007) 『ノダの意味・機能-関連性理論の観点から-』. くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『『の(だ)』の機能』くろしお出版
- 馬場俊臣 (2006) 『日本語の文接続表現-指示・接続・反復

-』おうふう

宮澤太聡 (2011) 「講義の「話段」におけるノダの機能と表現特性」『文体論研究 57』日本文体論学会

【分析資料】

- ①神野直彦 (2010) 『「分かち合い」の経済学』岩波書店
- ②熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史 近代から現代へ』岩波書店
- ③長尾真 (2001) 『「わかる」とは何か』岩波書店 ④齋藤孝 (2001) 『「できる人」はどこがちがうのか』ちくま書店
- 講義4資料については、基盤研究(c)「学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発」研究代表者西條美紀教授の資料の一部の使用許可を研究分担者の佐久間まゆみ教授からいただいた。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 23720273, 23320110 の助成を受けたものです。